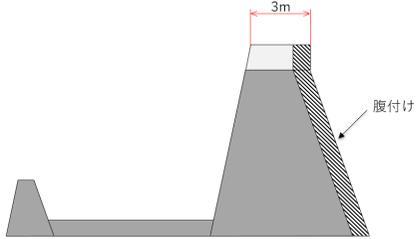
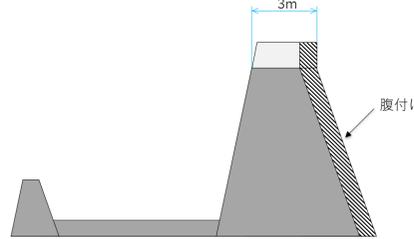


新編・鋼製砂防構造物設計便覧 正誤表(220510)

章	頁数	行数・図番	誤	正
2章	p.37	14行目	「最大樹高を h_{wm} (m) とすると、」	「最大樹高を H_{wm} (m) とすると、」
2章	p.41	表2.9	「(1) 軸方向が引張の場合 $\sigma_t + \sigma_{bt} \leq \sigma_{bt}$ かつ $-\sigma_t + \sigma_{bc} \leq \sigma$ 」	「(1) 軸方向が引張の場合 $\sigma_t + \sigma_{bt} \leq \sigma_{ta}$ かつ $-\sigma_t + \sigma_{bc} \leq \sigma_{ba}$ 」
2章	p.47	7行目	STK490の降伏応力を 3200N/mm^2 、許容応力を 1900N/mm^2 とすると、温度応力の安全率は1.5なので 2100N/mm^2 ($3200/2100 \approx 1.5$)となる。割増係数に直すと $2100/1900 \approx 1.15$ となり、温度応力の割増しは1.15となる。	STK490の降伏応力を 315N/mm^2 、許容応力を 185N/mm^2 とすると、温度応力の安全率は1.5なので N/mm^2 ($315/210 \approx 1.5$)となる。割増係数に直すと $210/185 \approx 1.15$ となり、温度応力の割増しは1.15となる。
2章	p.48	5行目	鋼管STK490の許容応力度 1900 N/mm^2 、降伏応力度 3200 N/mm^2 を例に説明します。設計外力に対して許容応力度内に収まるよう設計を考える場合、弾性範囲内に収まるように断面を求めますが、実際には降伏応力度まで弾性が保たれるので、 $3200/1900 \approx 1.7$ の余裕があります。	鋼管STK490の許容応力度 185 N/mm^2 、降伏応力度 315 N/mm^2 を例に説明します。設計外力に対して許容応力度内に収まるよう設計を考える場合、弾性範囲内に収まるように断面を求めますが、実際には降伏応力度まで弾性が保たれるので、 $315/185 \approx 1.7$ の余裕があります。
2章	p.48	17行目	例えば、土石流時の1.5とは $1900 \times 1.5 = 2850\text{ N/mm}^2$ を許容応力度とすることであり、安全率に直すと $3200/2850 \approx 1.1$ となります。	例えば、土石流時の1.5とは $185 \times 1.5 = 278\text{ N/mm}^2$ を許容応力度とすることであり、安全率に直すと $315/278 \approx 1.1$ となります。
2章	p.57	表2.20右下	(掃流における余裕しろ緩和条件) 「取り合え前提の部材は0.0mmでもよい。」	(掃流における余裕しろ緩和条件) 「取り替え前提の部材は0.0mmでもよい。」
3章	p.74	16行目	「【参考5】土砂捕捉量と堰堤軸の関係を参照」	「【SABO技術ノート】5.設計外力のはなしを参照」
3章	p.80	8行目	「図3.21の方法で最大礫径を設定すべきでしょう。」	「図3.19の方法で最大礫径を設定すべきでしょう。」
3章	p.114	23,27行目	「 δE 」 「 θ_{pa} 」	「 δE 」 「 θ_{pa} 」
3章	p.114	35行目	「ひずみ速度が $100.5/\text{sec}$ 程度の場合に」	「ひずみ速度が $10^{0.5}/\text{sec}$ 程度の場合に」
3章	p.116	13行目	「(4) 面外荷重」	「(3) 面外荷重」
3章	p.133	7行目	「別途天端緩衝材や盛による保護、鉄筋による補強を～」	「別途天端緩衝材や盛土による保護、鉄筋による補強を～」
3章	p.133	22行目	「②袖部の下流のり勾配または、」	「②袖部の下流のり勾配は直または、」
3章	p.136	5,11行目	「「H22.3 事務連絡」に準拠し、」	「「H27.6 事務連絡」に準拠し、」
5章	p.183	図5.12上	寸法補助線位置が誤り 	天端幅まで寸法補助線を下流側にずらす 
参考資料	p.17	3行目	「 $K : 161(D_0/D)^{0.11}$ 」	「 $K : 161(D_0/D)^{0.11}$ 」
sabo	p.27	3行目	「その基準を順守しつつ、形状および寸法を確定するものdです。」	「その基準を順守しつつ、形状および寸法を確定するものです。」